
仮面ライダーディケイドNeo

kkk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイドNeo

【Nコード】

N2713K

【作者名】

kkk

【あらすじ】

スタークリスタル事件が解決してから数か月たった。しかし異常は起こり始めた。そして謎のオーロラによってネギが消えてしまい、悲しむパートナー達。それから数週間後、再び異常が起こり始めた。そんな時に現れたのは行方不明のネギとその父、サウザンドマスターことナギ・スプリングフィールドであった。そして、ネギ達の新たな物語が始まるうとしていた。全てを破壊し、全てを繋げ！
追伸

？仮面ライダーディケイドNeoはネギまをメインにして行おうと

思います。

？クウガの世界は「らきすた」でキバの世界は「CLAMPシリーズ」を組み合わせることにしましたが、他の世界（特にファイズとカブト）は未定ですので、仮面ライダーの世界と組み合わせたいアニメ作品をあげてください。

？流れによつてはオリジナルのライダーも登場します。

ブログ 「KKKスタジアム」<http://blogs.yahoo.co.jp/kazuono10202003>

おしらせ、設定変更点（前書き）

新たな小説です。よろしく願います。

おしらせ、設定変更点

注意

ネギま！？に登場するキャラの設定は変えています。（neoに近いような感じ。）

相坂さよ↓（残した点）足がある

明石裕奈↓（入れた点）戦車や銃火器が好きなこと。

朝倉和美↓特になし

綾瀬夕映↓（入れた点）ネギに片思いという設定

和泉亜子↓（入れた点）背中に傷がある。理科実験グッズのコレクター（除いた点）ネギ（大人バージョン）に恋をしている。

大河内アキラ↓（入れた点）アロワナを飼っている。

柿崎美砂↓（入れた点）彼氏あり

神楽坂明日菜↓（入れた点）性格が原作より（neoに近いような感じ。）

（除いた点）魔法無効化など魔法世界に関わることなし

春日美空↓（入れた点）魔法生徒の一人（除いた点）運動部四人組の1人

絡操茶々丸↓特になし

釘宮円↓特になし

古菲↓（入れた点）ネギの師匠

木乃衛木乃香↓（入れた点）ボケと突っ込みの両立キャラ。図書館部の一人

早乙女ハルナ↓特になし

桜咲刹那↓（除いた点）烏族であること。ボケ役

佐々木まき絵↓（入れた点）運動部四人組の一人。ネギのことが好き。モツのことを「お父さん」と呼ぶ。（除いた点）失格娘、地味扱い

椎名桜子↓特になし

龍宮真名↓（入れた点）ザジといつも一緒（除いた点）ボケな設定
超鈴音↓（除いた点）未来人という設定

長瀬楓↓特になし

那波千鶴↓（入れた点）夏美をおもちゃにしていること

鳴滝風香↓（入れた点）眼が赤

鳴滝史伽↓（入れた点）眼が青

葉加瀬聡美↓特になし

長谷川千雨↓（入れた点）HPを堂々と更新している。

エヴァンジェリンAKマクダウエル↓（入れた点）性格が原作より

（neoに近いような感じ。）

宮崎のどか↓特になし

村上夏美↓（入れた点）演劇部に入っている。

雪広あやか↓（入れた点）性格が原作より（neoに近いような感じ。）

（除いた点）まき絵を失格と呼ぶ。

四葉五月↓（入れた点）よくしゃべる

ザジレイニーディ↓（入れた点）よくしゃべる

おしらせ、設定変更点（後書き）

感想提示版にクロスさせたいアニメ作品を入れてください。決まり次第表示しますので楽しみにしてください。

プロローグ「消えたネギ」（前書き）

本編のディケイドとは違う展開で通りますので、楽しみにしてください。

プロローグ「消えたネギ」

スタークリスタル事件を終えてから一か月がたった。それからしばらく平和であったが、突如現れたオーロラによって一人の少年が消滅したことから始まった。

「うわああああん！！いやだよ！！」

「いなくなっちゃいやですう！！」

少年が消えたことにより泣きじゃくる鳴滝風香・史伽姉妹。

「そんな・・・」

「夏美ちゃん、落ち着いて・・・」

少年が消えたことにより戸惑う村上夏美とそれを落ち着かせようとする那波千鶴。

「私としたことが・・・」

「拙者も同じでござる！！自分を責めるな！！」

少年を助けられなかったことを悔やむ龍宮真名と長瀬楓

「ネギぼうず！！」

「ネギ先生！！」

「ネギ君！！」

消えた少年の名前を呼ぶ相坂さよ、明石裕奈、朝倉和美、和泉亜子、大河内アキラ、柿崎美砂、春日美空、釘宮円、古菲、佐々木まき絵、椎名桜子、超鈴音、葉加瀬聡美、長谷川千雨、四葉五月、ザジレイ、ニーデイ。

「ネギ先生・・・」

「あのバカ弟子が！！」

少年がいなくなったことを隠しながら悲しむ絡繰茶々丸とエヴァンジェリン

「そんな・・・」

「ありえないです。」

「うつつう・・・」

???「そんな・・・」

少年が消えたことに驚きを隠せない早乙女ハルナと綾瀬夕映。そして少年が消えたことを悲しむ宮崎のどかと雪広あやか。

???「ネギ君・・・」

???「兄貴!!!」

消えた少年の名前を呼ぶ高畑トカミチとアルベール・カモミール
???「私としたことが・・・」

???「ネギ君・・・」

少年が消えたことによつて悲しみと悔しさを隠せない木乃衛木乃香と桜咲刹那

そして・・・

???「なんでいなくなっちゃうのよ!!私達だつて守られてるばつかじゃないのに…。それがパートナーの役目でしょ・・・それなのになんでいなくなっちゃうのよ・・・この・・・ばかネギ!!!」

その少年、ネギ・スプリングフィールドがいなくなったことを悲しむ神楽坂明日菜。

明日菜「はっ!!!」

明日菜は目を覚めた。しかもかなり汗がびっしりであった。

木乃香「明日菜!!!?大丈夫なん?うなされているみたいやけど・・・」

明日菜「うん・・・」

木乃香「もしかしてあの夢を・・・」

明日菜「えええ・・・」

木乃香「ネギ君なら大丈夫え。きっとどこかで元気にやつとるえ。」

明日菜「そうよね・・・あいつがそう簡単には死なないからね。」

二人は部屋を出た。あれから一週間がたとうとしていた。ネギがいなくなつた日から・・・

続く

プロローグ「消えたネギ」（後書き）

次回 仮面ライダーディケイドNEO

謎のオーロラによって消えてしまったネギ。そして・・・異変は起きた。

木乃香「なんもかわらへん。」

明日菜「パクティオカードの力が使えなくなったの!!?」

カモ「おそらくネギの兄貴がいなくなったことでパクティオの力も失われたんじゃない・・・」

ネギ「明日菜さん!!早くディケイドライダーとライドブッカーを・・・」

明日菜「わかったわ。アンタを信じるわ!!」

ネギ「変身!!」

『カメンライド・ディケイド!!』

第1話「旅の始まり」ディケイド」

全てを破壊し、全てを繋げ!

第1話「旅の始まり」ディケイド（前書き）

改めて第一話を投稿します。楽しんで読んでください。

第1話「旅の始まり」ディケイド」

スタークリスタル事件が過ぎてから、その全ての原因となったアーニヤは麻帆良学園に生徒として通うこととなった。そして、そのあと、あれが起こり始めた。ネギが消えてしまった事件。

そして、放課後、明日菜、木乃香、刹那、のどかはネギが消えてしまった廃墟へとやってきた。そこには先客がいた。それは3A生徒全員であった。彼女達もネギのことで心配になってきたのであった。そこへ

タカミチ「君達も来てたんだ。」

ネカネ「みんな、ネギのことを・・・」

カモ「皆、兄貴のことを思って・・・」

現在、3A担任である高畑Tタカミチとネギの姉、ネカネ・スプリングフィールドとネギの相坊、カモも心配で見に来たのであった。そして、全員が学園から出ると・・・

のどか「皆さん、あれを見てください！！！」

のどかが叫ぶと灰色の壁が現れ、その場にいた全員を飲み込んだ。あやか「ここっていつたい・・・」

まき絵「またスタークリスタル事件の時みたいにな・・・」

和美「また魔法世界にな・・・」

アーニヤ「そんな・・・」

タカミチ「いや魔力は感じない・・・」

するとそこへ異形の怪物が現れた。それはステンドグラス状の怪物であった。

裕奈「あれって・・・」

亜子「仮面ライダーキバに出てくる・・・」

千雨「ファンガイア！！？」

刹那「どうなっているんだ！！？」

刹那、真名、楓、古菲は立ち向かったが、やられてしまった。

鳴滝姉妹「楓姉!!!」

明日菜「こうなったら変身よ!!!」

刹那「そうですね。」

そう、事件が終わってからネギの改良によって自分達もカードを出して、変身できるようになったのであった。

全員「アデアット!!!」

全員はそう叫んだが・・・

明日菜「あれ!？」

木乃香「なんもかわらへん。」

のどか「どうして・・・」

明日菜「パクティオーカードの力が使えなくなったの!!!」

カモ「おそらくネギの兄貴がいなくなったことでパクティオーの力も失われたんじゃない・・・」

ネカネ「その可能性はあるわね。」

タカミチ「とにかく逃げるんだ!!!」

34人と一匹はファンガイアから逃げた。それからグロンギ、アンノウン、ミラーモンスター、アンデッド、イマジンと仮面ライダーに出てくる怪人達が襲いかかってきたのであった。

そんな中で、逃げきった全員は廃墟の街へとやってきた。

のどか「あれって・・・なんでしょうか？」

それはカメラのようなものとカードケースのようなものであった。

そして明日菜はカードケースを開くと・・・

明日菜「これ、龍騎じゃん!!!?こっちはファイズ!!!」

カードケースの中には、カードが入っていて、そのカードは『クウガ』、『アギト』、『龍騎』、『ファイズ』、『ブレイド』、『響鬼』、『カブト』、『電王』、『キバ』・・・俗に言う『平成ライダーシリーズ』の主人公ライダー達が描かれていた。そして、そんな中で見たことがないような仮面ライダーのカードを見つけた。

明日菜「え・・・と」

木乃香「ディケイド?!」

するとおかしいことに気づいた。

明日菜「本屋ちゃんが二人いる!!?」

あやか「たしか・・・仮面ライダーに出てきている。」

するともう一人のどかは緑色の怪人に変わった。そう・・・

美砂、円、桜子「ワームだ!!?」

そう、仮面ライダーカブトに出てきた怪人、ワームである。

そして、同時にオーロラが現れて、そこからワームが現れた。

カモ「これはかなりやばいぜ!!?」

すると、突然現れた光の矢を受けたワーム達が倒された。

刹那「これって・・・」

まき絵「魔法?」

すると、そこから一人の少年が現れた。

明日菜「ネギ!!?」

ネギ「明日菜さん!!早くディケイドライバーとライドブッカードを・・・」

・・・

明日菜「これを・・・」

あやか「これ、ネギの先生でしたのね。」

ネギ「とにかく、これをお願いします!!?」

明日菜はしばらく考え・・・

明日菜「わかったわ。アンタを信じるわ!!」

明日菜はディケイドライバーとライドブッカードをネギに渡した。

ネギ「これで・・・」

ネギは杖をカード化するとドライバーの中に入れた。そして、一枚

のカードを取り出した。

ネギ「変身!!」

『カメンライド・ディケイド!!』

ネギはディケイドに変身して、ワームに立ち向かった。

続く 次のステージ・ネギまの世界

第1話「旅の始まり」ディケイド」（後書き）

ついに始まったディケイドの戦いが、そして
タカミチ「貴方は!!?」

エヴァンジェリン「ナギ!!?」

レジェンド「通りすがりの仮面ライダーだ!!覚えておけ!!」
そして・・・旅が始まった。

明日菜「旅をしたら、私達の力も取り戻すよね。」

ネギ「ここは・・・クウガの世界。」

次回 第2話「伝説の力」ディケイド・レジェンド」
全てを破壊し、全てを繋げ!

第2話「伝説の力、ディケイド・レジェンド」（前書き）

今回からオリジナルのライダーを出します。あとクウガの世界に出てくるユウスケは本家に出てくるユウスケとは別人です。

第2話「伝説の力」ディケイド・レジェンド」

明日菜「ネギが仮面ライダーになった……」

のどか「すごい……」

刹那「どうなっているんだ。」

そして、ディケイドに変身したネギはワームに立ち向かった。しかし別のワームがディケイドに襲いかかるうとしていた。しかし何者かが攻撃してきた。それは……

レジェンド「大丈夫か？ネギ？」

タカミチ「貴方は……？」

エヴァンジェリン「ナギ……？」

レジェンド「ワームならこいつだろ……！」

ディケイド「はい……！」

二人はカードを取り出すと、ドライバーに入れた。

『カメンライド・カブト……！』

『カメンライド・カブト・ハイパー……！』

そして、ディケイドはカブトへ、レジェンドはカブト・ハイパーフォームに変身した。

それをみたワーム達はクロックアップシステムで対抗しようとするが、

LカブトH「こっちもクロックアップシステムだ……！」

Dカブト「はい……！」

すると二人のカブトはドライバーにカードを入れた。

『アタックライド・クロックアップ』

二人は高速移動を開始し、ワームを攻撃した。クロックアップが切れると、それと同時にワームは、爆死した。そして、ディケイドライバーから、カブトのカードが、飛び出し、Dカブトは、元のディケイドに戻ってしまった。そして、カードは、ディケイドの手に収まると、カブトの絵は、色を失い灰色になってしまった。しかし、

レジェンドのカードは絵が消えなかった。

デイケイド「これは・・・」

レジェンド「またか・・・」

すると

あやか「きゃあああああああああああ！！！」

デイケイドとレジェンドが振り向くと、明日菜達が灰色の怪人、オルフェノクに襲われていた。

レジェンド「オルフェノクなら・・・」

デイケイド「これですね。」

二人は新たなカードを入れた。

『カメンライド・ファイズ！！』

『カメンライド・ファイズ・ブラスター！！』

デイケイドはファイズへ、レジェンドはファイズ・ブラスターフォームへと変身した。

そして・・・

『アタックライド・ファイズエッジ！！』

『アタックライド・フォトンブレイカー！！』

Dファイズの手にはファイズエッジが、LファイズBの手にはファイズブラスター・フォトンブレイカーモードが装備された。そして・

・

Dファイズ、LファイズB「はああああああああああああああああああああ！！！！！」

それぞれの斬激でオルフェノクは青い炎に包まれると、灰と化して崩れ落ちた。

すると、先ほど度同じようにカードが、飛び出してデイケイドに戻ると、カードは色を失った。

デイケイド「また！！？」

明日菜「どうなっているの！！？」

すると、今度は巨大な魔化魍が現れた。
デイケイド「魔化魍ならこれですね。」

レジェンド「ああ!!」

二人は新たなカードを入れた。

『カメンライド・ヒビキ!!』

『カメンライド・ヒビキ・アームド!!』

デイクライドは響鬼へ、レジェンドは装甲響鬼へと変身した。

カモ「また変わっちまったぜ!!!」

その場にいる全員はもう慣れてしまったようだ。

そして……

『アタックライド・オングキボウ・レッカ!!』

『アタックライド・アームドセイバー!!』

D 響鬼の手には音激棒・列火が、L 装甲響鬼の手には装甲声刃が装備された。

そして、それぞれから放った火炎弾と斬撃で魔化魍を打倒した。

そのあと

のどか「ネギ先生……無事でよかった。」

あやか「本当にご無事でしたわね。」

ネギ「はい……でも……」

明日菜「どうしたのよ？」

ネギが、ライダーカードを見せると、さっき使用したカブト、ファイズ、響鬼以外のライダーのカードも色を失っていた。

刹那「これって……」

ネギ「力が失っている? ということでしょうか？」

ナギ「それはお前が全てを失ったからだ。」

タカミチ「どういうことです？」

するとナギは指を鳴らすと、上のほうから九つの青い球体が、降りてきた。

千鶴「これって……地球？」

ナギ「そうだ!! 九つの世界に九人の仮面ライダーが生まれた……それは、すべてが独立した物語……。だが、九つの世界が一つ

になろうとしている・・・そうなる・・・世界は崩壊する。そして、そんな中で発生したオーロラは奴らの仕業によって作り出された。それにネギは巻き込まれたというわけだ。」

明日菜「そうなんだ。」

木乃香「どうすれば世界の崩壊は防げるん？」

ナギ「そのためにはネギがディケイドとなつて、九つの世界・・・イレギュラーをのぞいて旅をしてくれ・・・そして、すべてを破壊しすべてを繋いでくれると・・・」

そして

ナギ「あとお前達の力も九つの世界にあるかもしれない。そうすれば・・・また力を取り戻せるぜ!!」

カモ「まじかよ!!!?」

ネギ「これは、僕の問題ですから!みなさんはこの世界に・・・全員「ブー!!!!!だめ!!」

駄目だしであつた。

ネギ「皆さん!」

明日菜「聞いちゃつた以上、はいそうですかとは言えないでしょう!」

あやか「そうですわネギ先生!」

木乃香「ウチらパートナーやないか!」

のどか「一緒に旅に行きます。」

明日菜「ネギ、良いわね!!」

困惑するネギ。

ネカネ「パートナーを信じる事も大切よ!」

ネギ「お姉ちゃん!」

アーニヤ「断ると後が怖いかも!」

ネギ「アーニヤ!」

タカミチ「信じることも大事だよ。」

ネギ「タカミチ・・・」

カモ「アニキ!ここは有りがたく力借りようぜ!」

ネギ「カモ君：分かった！」

ナギ「そういうことなら俺についてこい！！」

3A全員とネギとネカネとアーニヤとタカミチとカモとナギがやってきたのは喫茶店であった。

明日菜「ここって・・・」

ナギ「ここが俺達の旅の出発点となる喫茶店「DCD」だ。とにかく入れ！！」

全員は「DCD」の中に入った。

学園長「おおお！！待っておったぞ。ナギにネギ君！！」

ネギ「学園長！！」

木乃香「お爺ちゃん！！？」

モツ「私達もいます！！」

シチミ「ネギちゃんの監視のためでもあるにやー！！」

生徒全員（まき絵以外）「モツ、シチミ！！？」

まき絵「お父さん！！？」

そこには学園長とモツとシチミがいた。

ナギ「これからの俺達の旅と同行することになったんだぜ。」

ネギ「そうなんですか？」

のどか「ところでどうやってライダーの世界に行くんですか？」

すると生徒達は一枚の絵画と三種類の31枚のカードに気づいた。

アーニヤ「これって・・・」

ナギ「これは俺達の旅に必要な扉のようなものだ。」

和美「このカードって・・・」

あやか「パクティオーカードですわね。」

ナギ「最初に向かう世界にカードの力が眠っていることだ。」

すると絵画が代わり始めた。それは遠くに灯溶山が見える道走っていくパトカーの列の絵であった。そして九枚のカードが飛んだ。それを手にしたのは・・・

明日菜「これって・・・」

木乃香「この世界にはうちと明日菜とせつちゃんの力があるってことなん？」

刹那「そうみたいです。」

すると外で騒ぎだしていた。

五人は外へ出ると、いつのまにか姿が変わっていた。ネギとナギは警察官の姿となり、明日菜、木乃香、刹那は婦警になっていた。

ネギ「これって……」

すると

警察官『山頂付近の廃棄工場に未確認生命体第7号が現れました。

付近の警官は速やかに現場に急行して下さい』

山頂付近の工場で警察官達は未確認生命体・グロンギの攻撃に苦戦していた。

つかさ「お姉ちゃん、このままではまずいよ!!」

みゆき「早く、ユウスケさん呼びましよう!!」

かがみ「わかったわ!!ユウスケ、すぐに現場に来て、グロンギを倒すのよ!!」

その通信を聞いていたのはバイクに乗っていたのは一人の青年と小学生並みの身長を持つ少女であった。

ユウスケ『わかったぜ、かがみ!!!ってなんでこなたまでいるんだよ!!!』

こなた『まあいいじゃない!!』

かがみ「ちよっ!!!こなた、アンタ現場にいないと思ったら・・・」

つかさ「ユウ君とここにいたんだね。」

するともう一体のグロンギがかがみたちに襲い掛かろうとしていた。

こなた「皆!!!!ユウスケ!!!!」

ユウスケ「ああ!!」

ユウスケは腰に手をあてた。すると腹部にベルトが現れ、ユウスケは腕を前へと構える。そして…

ユウスケ「変身!!」

優子は高らかに叫び、ベルトの左側を軽く押すと、優子の体が徐々

に赤い鎧の戦士、仮面ライダークウガへと変身していく。そして、クウガはそのままグロンギと戦い始めた。

それをみたネギは・・・

ネギ「ここは・・・」

ナギ「そう・・・ここはクウガの世界だ。」

続く

第2話「伝説の力、ディケイド・レジェンド」(後書き)

次回

ネギ「巡查ネギ・スプリングフィールド・・・これが僕達の役割ですね。」

明日菜「私達がやるべきことっていったい・・・?」

クウガ「聞いた通りだな!!この悪魔!!!」

謎の男「ディケイド、レジェンドよ。気をつける!!」

次回 第3話「クウガ・らき すたの世界」

A New Hero・A New Legend

第3話「クウガ・らき すたの世界」(前書き)

この小説では鳴滝はディケイドの味方です。あと鳴滝が召還したライダー達は別の人物が呼び出したという設定にしました。

第3話「クウガ・らき すたの世界」

まき絵「ここって異世界だよね。」

ナギ「そのとおりだ!!」

アーニヤ「ところで五人ともその姿は……」

ネギ「巡査ネギ・スプリングフィールド……これが僕達の役割ですね。」

明日菜「私達も婦警の姿になっている。」

木乃香「うちらもこの世界で失った力を取り戻すやね」

ナギ「まあ、とにかく外に出るぞ!!」

五人は外へ出た。

そのころ

クウガ「ハアアッ!!」

廃棄工場では未確認第4号、クウガに変身したユウスケが未確認7号と呼ばれるカマキリ型のグロンギと戦闘を行っていた。その近くでは、先程殺された女性の遺体が転がっていた。

クウガ「また女性警官を……」

クウガは心の中で毒づきながらも7号を攻撃していく。すると上空からもう一体、鳥型のグロンギが現れてクウガを襲ってきた。

クウガ「しまった!!」

クウガは現れたもう一体のグロンギの攻撃をかわしながら応戦する。そんな中、こなた、かがみ、つかさ、みゆきがやってきて、こなたはユウスケに命令を出す。

こなた「ユウスケ!! 気をつけて!!!」

クウガ「おう!!」

そういつてクウガは少し間合いを離し、変身の時同様に身構える。

クウガ「超変身ッ!!」

クウガが叫ぶと、その体が赤から青へと変わり、近くにあったパイ

ブ棒を拾って構えた。するとパイプ棒は一瞬で青い棒、ドラゴン・ロッドへと変わり、クウガはそれを使って反撃を開始した。それほど同時に廃棄工場にナギたちがやってきた。

ネギ「あれがクウガですか……」

明日菜「うん、そうよ。……ってネギ、仮面ライダー見てないの!？」

ネギ「はい……」

木乃香「クウガは古代より蘇ったグロンギと戦う戦士や。状況に応じてフォームを変え、周囲の物を武器に変化させる力があるんやえ。」

剎那「それにあの三人の刑事と小学生の少女はクウガのことを知っているみたいですね。」

ナギ「そのようだな。」

すると

かがみ「ちよつとあんた達!! 後退命令が出た筈よ!」

つかさ「しかも女性警官もいるし……」

みゆき「早く逃げてください!!」

そして……

クウガ「ハアアツ!」

そんなやり取りをしている中、クウガは7号と呼ばれるグロンギにドラゴン・ロッドを思いっきり打ち込んだ。

7号「グ、グウ……オオオオツ!」

7号は悲痛の叫びをあげ、その場で爆発して消滅していった。そしてそれを見たもう一体のグロンギは分が悪いと判断したのか、背中から翼を出して空へと逃げていった。

こなた「ユウスケ!!」

寛人は自分の銃をクウガに渡した。

クウガ「こなた!! 超変身ツ!!」

クウガが叫ぶと、今度は緑になり、手に持っていた銃も緑のラインが入ったペガサス・ボウガンに変化した。クウガはそのペガサス・

ボウガンを構えながらジャンプし、屋上へと登っていった。そのクウガを確認した後、かがみはネギ達の方を向き…

かがみ「言いふらさないでよ！」

と言って屋上へと向かっていった。どうやらクウガの正体は秘密らしい。

ナギ「成る程ね。…取り敢えずクウガの確認は出来たな。一旦戻るとするか」

ネギ「父さん!!」

ネギたちはこれからの事を考える為に家へと戻っていった。

廃棄工場の屋上に飛びあがったクウガは、飛び去ろうとする8号にペガサス・ボウガンの銃口を向け、意識を集中する。ペガサスフォームが有する超感覚が8号を捉え、引き金を引いた封印の力を宿した空気弾が、8号を射抜き、その体は爆砕した。グロンギを倒したことを確認したクウガは変身を解除した。

こなた「やったね。ユウスケ。」

ユウスケ「ああ・・・」

ユウスケはこなたに銃を返した。その顔は浮かない顔であった。

つかさ「ユウくん。浮かない顔だけど・・・」

ユウスケ「犠牲者を防げなかった・・・」

みゆき「ユウスケさんのせいでは・・・」

ユウスケ「・・・でも、大丈夫だ!!今度は犠牲者を出す前にグロンギを倒す!!」

かがみ「ユウスケ、無理は禁物よ・・・アンタのクウガの力はまだ謎が多いんだから・・・」

場所は移って、警視庁「未確認生命体対策本部」の会議室
みゆき「また、被害者は女性警官。犠牲者はこれで3人・・・職務中の女性警官ばかりが襲われています。」

警視庁「未確認生命体対策本部」の会議室で、みゆきは集まった捜査員にそう告げた。

捜査員「つまり、敵は今回、女性警官を殺人のターゲットにしている？」

みゆき「ええ、そういうことになります。」

捜査員「しかし、高良警部。我々、警察は対グロンギの為に動いています。被害者が警察官というのはむしろ当然なのでは？」

捜査員「確かに、今回の件については3件目・・・共通項を断定するのは早すぎるのでは・・・」

そう告げる捜査員が数名。

みゆき「ですが、・・・未確認生命体——グロンギは今まで、一定の手順に従って殺人を行い、被害者にも共通点があります。」

だが、みゆきの意見を肯定する捜査員もいた。

みゆき「そう、私が上げた『グロンギ・ゲーム殺人説』にそって考えるなら・・・あり得ない話ではありません。」

そう言ってテーブルの上に載った残り少ないお茶を飲もうとしたみゆきの湯飲みに、

お茶がドボドボと注ぎ込まれた。

みゆき「えー！？」

ナギ「いくつかの共通点を保ったまま、殺人を続けていく・・・本当にゲームなんだな。」

ネギ「父さん・・・勝手に入っちゃだめだよ。」

カモ「本当に自由翻弄しているな・・・」

そこには、今回の事件の犠牲者の情報が記載されたホワイトボードに視線を移したままヤカンのお茶をそそぐナギとネギがいた。

みゆき「貴方達は・・・ここは対策本部ですよ。」

ナギ「細かいことを気にするなー！！」

『緊急通報！！先程と別種の未確認生命体が、警邏中のパトロール隊員と接触した模様。繰り返す——』

みゆき「仕方ありません、この件はあとで！全員グロンギをなんとかします。全員出動！！」

告げるふみにこに捜査員は頷き、会議室を飛び出していく。

みゆき「私達も・・・」

こなた「おう!!」

こなた達も飛び出した。

ナギ「・・・さてと」

それをただ一人見送り、ナギは改めてホワイトボードへ向き直り、そこに書かれた内容にもう一度目を通して、

ナギ「・・・よし」

ネギ「父さん・・・何を・・・」

ナギ「まあ任せろって・・・」

一度だけ頷くとホワイトボード用マーカーを持ち、そのキャップを外した。

火山付近の川原...

此処にまたグロンギが現れ、二人いる女性警察官の内一人を襲っていた。そして、その女性の息の根を止めた事を確認したグロンギは逃げるようにその奥のトンネルへと逃げていった。だが...

グロンギ「?!クウガバ?」

デイケイド「クウガ?違います。」

トンネルの向こう側からやって来たデイケイドに変身したネギとレジエンドに変身したナギに、グロンギは足止めされる。

グロンギ「リントギ、ガサバダギデボバ!」

レジエンド「グギグギうるせえな。ちよつと話を聞きたいだけだからよ。」

そんな戦闘が行われている中、先程殺された女性警察官の所にユウスケとこなたとかがみとつかさとみゆきが駆けつけた。

こなた「四人目の犠牲者・・・ッ!!9号は!!?」

すると突然トンネルからグロンギが吹っ飛ばされるように現れ、それを五人が啞然と見る中、更に奥からデイケイドとレジエンドがゆっくりと歩きながら現れた。

ユウスケ「な、なんだ・・・アイツ...?」

かがみ「未確認...10号と11号?」

つかさ「どうなってるの?」

二人はそんな戦いを唾然として見ていた。

そしてデイケイドとレジェンドはライドブッカーから一枚のカードを抜き取り、それをバツクルへと装填してスライドさせる。

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイケイド』

『ファイナルアタックライド・レ・レ・レ・レジェンド』

電子音声が響くと同時に、二人の前にライドカードのようなオーラが数枚現れる。

デイケイド「ハアアッ!」

デイケイドは高く飛び、オーラを潜るようにグロンギへと蹴りを放っていった。

複数あるデイケイドの技の一つ、デイメンションキックとレジェンドの技の一つ、レジェンドキックが炸裂し、グロンギは断末魔の叫びをあげながら爆発して散っていった。それを確認したデイケイドはデイケイダーの元へと歩いていく。

ユウスケ「ちよつと待て!!お前ら、どうしておなじ未確認を・・・

・
」

デイケイド「僕達はグロンギじゃありません。」

ユウスケ「答えになっていないぞ!!」

そしてデイケイドはそのまま走り去った。

その夜、『D.C.D』では明日菜たちがくつろいでいた。

木乃香「ネギ君とナギさん、遅いなー。」

刹那「そうですね。」

すると

ユウスケ「あれ?喫茶店だったけ・・・」

こなた「変わってるみたいだね。」

ユウスケとこなたとかがみとつかさとみゆきが入ってきたのであつ

た。

のどか「あつ、いらつしやいませ。」

あやか「ようこそ、喫茶店「DCD」へ……。」

五月「よろしかったらくつろいでください。お茶も用意しますので。」

みゆき「そうですか……。それではお言葉に甘えさせていただきます。」

五人はお茶をしていると

ネギ「ただいま、戻りました。」

木乃香「二人ともお帰りなさい。」

ナギ「こっちは腹が減っているんだ。なにか食わせろ!!」

エヴァンジェリン「お前はずうずうしいぞ!!」

するとユウスケは帰る準備をしていた。するとのどかが

のどか「あの……。」

ユウスケ「君はたしかのどかちゃんだっけ。俺になんか用か？」

のどか「ユウスケさんってクウガですか？」

ユウスケ「どうして!!?それを!!!」

のどか「いや……その……。」

ユウスケ「ごめん……驚かせて……。」

のどか「いえ……でもすごいですね。誰かのために戦うなんて……。」

ユウスケ「いや……。俺は自分のために戦っているだけだ……。」

それに……。」

のどか「え!？」

ユウスケ「俺は誰も守れてない……。」

ユウスケはバイクに乗るとそのまま走り去った。

そして、こなた達も「DCD」から出ようとしたとき

ナギ「アンタ、ちよつといいか？」

みゆき「はい……?」

ナギはみゆきに紙切れを渡した。

ナギ「明日これに書いてある場所に来てくれ。あのユウスケとかいう奴も連れてな」

みゆき「わかりました。」

こなた達も外へ出た。

ネギ「さっきの紙って・・・」

ナギ「ちよつとしたパーティだ。」

翌日・・・火山付近の広場

こなた「どうして呼ばれたんだろうね。」

ユウスケ「いったいどういうことなんだ？」

みゆき「ナギさん、それからネギ君。説明をお願いします。」

ナギ「そうだな。まずはあの山についてだ。どうやらあの山に究極の闇とやらが眠っているらしいぜ。」

ナギは指を刺した。

かがみ「究極の闇？一体何処からそんな情報・・・」

ネギ「昨日、奴らから聞きました。その究極の闇を復活させる為に行われているのが、今回のゲゲル。そしてそのルールは・・・あの山から近い五ヶ所の場所で五人の戦う女のリント、つまり女性警察官を殺す事だ。そうすれば究極の闇とやらが復活するらしいです。」

こなた「そういうことか・・・究極の闇の復活。それが今回のゲゲルと、君達はそう言いたいのだな？」

ナギ「そういうことだ！」

する・・・（ゲロンギ語が分からないので（）の形にします）

ナギ「（隠れていないで出てこい！！）」

明日菜「え！！？」

刹那「ナギさんがゲロンギ語を・・・」

そしてそれと同時に木の上から二体のゲロンギが姿を現した。

ゲロンギ？（ゲゲルを始めるぞ！）」

グロンギ?」「(そのリントの女を殺せば終わりだ!)」

ネギ「(今回も二人係ですか・・・)」

つかさ「言語学者が解析しようとしても出来なかったのに!」

ナギ「此処で五人目を殺せば、究極の闇が復活するらしいぜ。ネギ、やれ!」

ネギ「でも・・・」

ナギ「いいから・・・」

ネギ「はい・・・ごめんなさい!!」

するとネギはかがみの顔にめがけて石を投げた。

かがみ「うわあ!!!危ないじゃないの!!!」

かがみはとっさによけることができたが・・・

つかさ「はうつ!!!」

その石はつかさのおでこに当たった。おでこから血が出てきた。

かがみ「つかさ!!!」

こなた「大丈夫!!!」

明日菜「アンタ!!!いきなりなにしてんのよ!!!」

明日菜はネギの頭をぐりぐりし始めた。

ナギ「落ち着けてあれを見る!!!」

ユウスケ「え!」

するとグロンギがうろたえていた。

グロンギ?」「(リントから血が出た・・・)」

グロンギ?」「(聖なるゲゲルは失敗だ)」

そして、その場から去った。

ナギ「こいつ等は今まで、一滴の血も流さずに殺していた」

ナギに言われてこなた達は気づく。確かに今までの被害者からは血は一滴も流れていなかったのだ。

ナギ「聖なるゲゲル。血を流さずに殺す事が最大のルール。でも、それも失敗だ。なんせ、血が流れちまったんだからね!」

ユウスケ「アンタ達、それを見せるために・・・」

ネギ「余計な被害を出さないように、ゲゲルを終わらせたのです。

やりたくわなかったですけれど・・・」

とにかく行くわよ!!」

翼は自分のバックル、ディケイドライダーとレジェンドライダーを取り出して腰にセットする。そしてドライバーからベルトが巻かれ、ネギとナギは左側の腰にあるライドブツカーからディケイドとレジェンドのカードを取り出す。

ネギ、ナギ「変身!!」

『カメンライド・ディケイド!!』

『カメンライド・レジェンド!!』

それぞれディケイドとレジェンドに変身した。

ユウスケ「ディケイドとレジェンドだと・・・」

こなた「ユウスケ、あいつら・・・」

そついうとユウスケはネギたちを追いかけた。

そしてディケイドとレジェンドはグロンギと闘い始めた。そしてそのうちの一体を倒した。

レジェンド「やったな!!」

ディケイド「はい。」

そんなときユウスケがやってきた。険しい表情であった。

ユウスケ「ディケイド…彼があの子が言っていた存在の可能性は限りなく高いな・・・変身!!」

そしてそのままクウガに変身するとディケイドとレジェンドに向かった。

ディケイド「ちょっと!!?なにするんですか!!」

みゆき「ユウスケさん、一体何を・・・」

クウガ「聞いた通りだな!!この悪魔!!」

ディケイド「どういう意味よ!!」

クウガ「いつか現れると聞いていた!全てのライダーを滅ぼす存在を!!」

そんなとき、もう一体のグロンギが襲いかかるが、クウガの手によ

って倒された。

ディケイド「ユウスケさん、やめてください！僕達が戦う理由なんてありません！！」

クウガ「うるさい！！」

レジェンド「こうなったら・・・正当防衛だ！！」

『アタックライド！！ブラスト！！』

ディケイドとレジェンドはディケイドブラストレジェンドブラストを放った。クウガもタイタンフォームとなり、タイタンソードで攻撃した。そんなとき、

木乃香「三人ともやめて！！！！三人が戦う理由なんかないえ！！！！」
しかし三人は戦い続けた。そんなとき、二人の戦いを、影で見ている男がいた。

謎の男「なんということだ・・・彼らを何とかしないと・・・」
男がそういった次の瞬間、辺りに歪みが発生していく。

クウガ「なんなんだよ？！」

ディケイド「この歪みは・・・あの時の！？」

レジェンド「まさか・・・」

レジェンド達は一瞬同様するが、歪みが晴れると其処には緑と灰色の色をした似た姿のライダーが二人立っていた。

パンチ「兄貴、此処にもライダーがいたよ」

キック「そうだな・・・行くぞ相棒・・・」

二人のライダーがそう言うと、いきなりディケイドとクウガに向かって攻撃をしてきた。

クウガ「な、なんなんだよ、こいつ等？！」

ディケイド「クッ・・・次から次へと・・・！」

レジェンド「お前ら、もしかして・・・」

二人は現れたライダー達の攻撃をなんとかかわした。果たして現れたこのライダー達は何者なのか？そして、先程の男は一体・・・

次の世界 クウガ・らき すたの世界

第3話「クウガ・らき すたの世界」(後書き)

次回

謎の男「デイケイドとレジェンドは悪魔ではない。」

こなた「私達はいつだってユウスケの味方だよ。」

ユウスケ「俺は戦う!!」

ネギ「この人が誰かを笑顔にするなら、僕は全力でこいつを支えます!」

次回 第4話「超絶・クウガゴウラム」

A New Hero・A New Legend

第4話「超絶・クウガゴウラム」(前書き)

今回でクウガの世界は終わります。次回のキバの世界は少しアレンジしますので楽しみにしてください。

第4話「超絶・クウガゴウラム」

突然とディケイドとレジェンドとクウガに襲い掛かったキックホッパーとパンチホッパー。

クウガ「これもお前らの罠なのか!!?」

レジェンド「しらねえよ!!こいつらいたい・・・」

ディケイド「貴方達はいったい・・・」

キックホッパーとパンチホッパーに苦戦する三人。

クウガ「…クッ!」

キック「ッ!貴様ア、今相棒を笑ったなあ…?」

ディケイドとレジェンドと戦っていたキックホッパーはクウガが毒づいたのを笑ったと勘違いし、キックホッパーはターゲットをディケイドからクウガへと変更していく。

キック「笑ったなあ!」

クウガ「何?!」

キックホッパーはクウガに向かって回し蹴りを放つ。クウガは耐えきれず吹っ飛ばされ、ホッパー達はクウガに追撃の集中攻撃をする。そしてディケイドも無視されて腹が立ったようで、ライドブッカーをガンモードにしてホッパー達に攻撃していった。

レジェンド「どこ狙っているんだよ!!!というよりお前達、どこから来たんだ!!」

キック「地獄からだ!」

パンチ「お前等も、来い…!」

そういつてホッパー達は再びディケイド達に襲いかかっていく。対するディケイドはブラストのカードをディケイドライバーへと装填してスライドさせる。

『アタックライド!!ブラスト!!』

ディケイドはホッパーに向かって乱射する。しかし、ディケイドとホッパー達の間にまた歪みが現れてしまい、ディケイドの攻撃は届

かずに終わってしまった。

パンチ「…行こうよ、兄貴」

キック「ああ…また別の地獄が待っている…」

そう言うのとホッパ―達は歪みと共に消えていった。するとクウガがまた襲い掛かるうとしていた。すると…

男「やめろ！！クウガ！！」

クウガ「アンタは…」

先ほどの男が現れた。そして、お互いに変身を解除した。

ナギ「あいつらはいったいなんなんだ？」

謎の男「私にもわからない。それよりも君達には迷惑を掛けてしまったな。」

ナギ「気にするな！！」

ネギ「貴方はいつたい…」

鳴滝「私は鳴滝。君達の味方だ。」

ユウスケ「アンタ。何言っているんだよ！！ディケイドとレジエンドという悪魔がくるって言ったのはアンタじゃないか！！」

鳴滝「それは私ではない！！何者かが私に成りすまして君にうその予言を言っただ。」

ナギ「それよりも奴らが動き出したな。」

鳴滝「ああ、だが究極の闇の復活を防ぐことができた。これで大丈夫だろう。」

そっというと鳴滝は消えた。

その後、ユウスケ、こなた、かがみ、つかさ、みゆきを連れて、ネギ達は彼らをご馳走してあげることにした。

ユウスケ「うめえ！！」

つかさ「この肉まん、本当においしい！！」

みゆき「すみません、ご馳走させていただいて…」

五月「気にしないでください。肉まんのお代わり、まだありますから。」

こなた「かがみはまだ足りなさそうなのでもっとお願いします。」
かがみ「こなた!!」

ユウスケ「でもかがみもこれで五個めだぞ。いいかげんにしないと・
・・」

ゴチン!!

ユウスケ「ギヤア!!」

かがみ「余計なことを言うな!!」

こなた「おお、ユウスケもかがみのお怒りの鉄拳を食らったよう
で・・・」

ゴチン!!

こなた「はべし!!なんで私まで・・・」

かがみ「アンタもさっき余計なことを言ったからよ。あとかがみん
言うな!!」

五人の風景をみたネギ達は笑っていた。すると・・・

のどか「あのユウスケさん・・・あの時ネギ先生とナギさんを悪魔
とிட்டたんですか?」

ユウスケ「ああ、あれは俺がベルトを手に入れたときだ・・・」

ここはユウスケがアークルを手に入れた洞窟である。すると謎の男
が現れた。

男「いつか君の前に悪魔が現れる。その名前はディケイド・・・」

ネギ「そうですか・・・」

明日菜「でもあの鳴滝なんですがって言う人は・・・」

風香、史伽「何?」

明日菜「アンタ達のことじゃないわよ!!その人は味方だといった
わよ。」

ナギ「しかもなんの疑いもせずにな・・・」
すると

亜子「大変やー!!」

ネギ「どうしたんですか？亜子さん？」

亜子「テレビを見て！！」

亜子が慌てた様子でやってきた。ネギたちもテレビに集中した。アナウンサー「突然、山頂から黒い煙が発生し、現在もその煙が広がっています。これは山火事とかではなく、先程この山頂を調査する為に登った警察隊も連絡は途絶えてしまい、中の様子も気になります。」

その内容に驚くネギたち

タカミチ「まさか・・・ゲゲルが成功したのか？」

かがみ「じゃあ・・・どうして連絡を・・・」

みゆき「そんな情報は流れておりません。」

するとナギが喫茶店から出た。

ネギ「父さん・・・どこへ？」

ナギ「俺なら、あのガスに耐えられるはずだ・・・みんなは、待っていてくれ」

そういうとナギは外へと出た。

火山・山頂に発生した黒い煙は徐々に広がり、中にいた警察官達はその煙を吸うと苦しみだし、次々と倒れていく。

刑事「助けてくれ・・・」

一人の男性刑事がそう言いながら息絶えていく。そしてその頃、山頂にある空洞の中にある一つの石碑が崩れ、中から一体の赤いオオカミに似たグロンギが姿を現した。その現れたグロンギが咆哮する
と...

ガミオ「ぐおおおおおおお！！！！」

なんと、息絶えた筈の警察官達が次々とグロンギとなって蘇っていた。

レジェンド「な?!人間が...グロンギに...?!」

突然の出来事に驚くレジェンドに変身したナギ。そんなレジェンドにグロンギ達が襲いかかろうとするがなんとかなぎ払った。

レジェンド「くっ・・・この奥か!!」

そして先程現れたグロンギ、ン・ガミオ・ゼダも山を降りようとするが・・・

レジェンド「この先は通さないぜ!!」

レジェンドが立ちふさがった。

ガミオ「バセゴセザレザレタ? (何故俺は目覚めた?)」

レジェンド「なんだっど?」

ガミオ「俺は二度と目覚めぬ筈だった!!」

突然、人語を喋ったガミオに驚くレジェンド。そして、その胸には光り輝くカードのようなものがあつた。

レジェンド「くっ・・・奴らの仕業か・・・」

ガミオ「だが、もう遅い!! リントは、すべてグロンギとなり、この世を究極の闇が覆いつくす!!」

レジェンド「そんなことさせるか!!」

レジェンドはライドブッカー・ネオで切りかかるが・・・

ガシッ!!

レジェンド「何!!?」

ガミオに受け止められてしまった。

ガミオ「消えろ!!」

ガミオは赤い電撃をレジェンドに食らわした。

レジェンド「ぐわあああああああ!!!!!!」

レジェンドは吹き飛ばされ、洞窟の壁に叩きつけられた。

ガミオ「ふっ・・・」

そして、ガミオは煙と共に麓へと降りていき、徐々に街を覆っていた。

一方、喫茶「DCD」では・・・

裕奈「ここって大丈夫かにゃ?」

アキラ「ナギさんはここまでは黒い煙は来ないって・・・」

タカミチ「念のため、僕とネカネ君は結界を張っておくよ。」

エヴァンジェリン「私も・・・と言いたいところだが魔力まで低下しているからな・・・」

ネギ「無理はいけません。」

こなた「魔法？」

のどか「実はですね・・・」

すると

ナギ「くっ・・・」

血だらけになったナギが戻ってきた。

ネギ「父さん!!」

亜子「大丈夫ですか？」

ナギ「なんとか・・・な・・・だが気をつける!!あの煙をすつたら人間はグロンギに変わってしまう!!」

ユウスケ「アンタ・・・ゲゲルは失敗したと言っていた筈だろ。それが、どうしてこんな事に・・・」

ナギ「...元々奴は目覚める筈のない存在だった。でも、この世界も俺達の世界と同じように、滅びの現象が起き始めている。」

かがみ「別の世界って・・・」

ネギ「僕達は別の世界から来ました。世界の崩壊を防ぐために・・・」

すると

アナウンサー「突如黒い煙と共に現れた未確認生命体は街にいる人々を襲い始めました。一部の情報によると、黒い煙の中にいる死者が未確認生命体となって蘇る等...」

こなた「...このままじゃ被害が広がってしまう」

ナギ「行くぞ!!」

ネギ「はい!!」

ナギとネギは外へ出た。しかし・・・ユウスケは

ユウスケ「俺は・・・もう戦えない!!」

こなた「え!!?」

つかさ「どういうことユウ君!!」

ユウスケ「俺・・・本当は皆に認めてもらいたくて戦っていた・・・
なのにこんなことになったら・・・俺・・・もう・・・」

かがみ「何言ってるのよ!!」

ユウスケ「かがみ・・・」

かがみ「アンタ・・・その力のおかげでみんなの笑顔を守れてるじゃない!!」

みゆき「かがみさんのいうとおりです。私達はユウスケさんの味方です!!」

つかさ「そうだよ。」

こなた「私達はいつだってユウスケの味方だよ!!」

ユウスケ「こなた・・・」

ユウスケは何かやるべきことを思い出したのでネギ達の下へと向かった。

一方、町では高層ビルの屋上でガミオは人間が Grongi に襲われ、死に絶えて Grongi となる繰り返しをただ眺めていた。

ガミオ「リントは全て Grongi と化し、戦いを求め続ける。そしてこの世を究極の闇が覆い尽くす!! ン?」

ガミオが違和感を感じ、その方向を見ると、既にデイケイドライバーとレジェンドライバーを装着しながら歩み寄ってくるネギとナギがいた。

ガミオ「...お前達はクウガでもこの世界のリントでもない」

ナギ「そうだな。」

ガミオ「お互い・・・この世界にいてはならない存在のようだ・・・
だが、リントは殺しあう Grongi となる・・・それが運命だったのだ・・・」

ネギ「僕達の運命は貴方に決めてもらう必要はありません!!」

そして、ネギとナギは自分のバックル、デイケイドライバーとレジェンドライバーを取り出して腰にセットする。そしてドライバーからベルトが巻かれ、ネギとナギは左側の腰にあるライドブッカーか

らディケイドとレジェンドのカードを取り出す。

ネギ、ナギ「変身!!」

『カメンライド・ディケイド!!』

『カメンライド・レジェンド!!』

それぞれディケイドとレジェンドに変身した。そのままガミオに向かうが

ガミオ「むん!!」

ディケイド「ぐわ!!」

レジェンド「がつ!!」

返り討ちにあい墜落した。さらに追い討ちをかけるように二人をグロンギが襲いかかった。

レジェンド「クソッ! 一体どれだけグロンギになったんだ?!」

ディケイド「このままでは……」

そして、遂に攻撃を受けてしまい、変身が解除されてしまった。そしてグロンギ達はネギとナギに襲い掛かった。

ネギ「は……は……この世界が僕達の死に場所なの!!? 冗談じゃない!!」

ナギ「俺達は俺達のやり方で生きる!!」

二人は立ち向かうが、返り討ちにあうだけであつた。すると……一台のバイクが現れた。そこにはクウガに変身したユウスケと明日菜と木乃香と刹那がいた。

ネギ「ユウスケさん……」

クウガ「俺は戦う!!」

明日菜「このネギ坊主!! 一人でなんでもやろうとしてるんじゃないわよ!!」

木乃香「なんともいうけどこちらはパートナーやん!!」

ネギ「みなさん……」

クウガ「アンタ達だけに戦わせたなら皆笑顔でいられなくなる!!」

ナギ「ユウスケ……」

クウガは攻撃を受けながらも必死に戦っていく。だが……

ガミオ「又オオオオオオツ!!!!!!」

上空にいたガミオが巨大なエネルギー弾を地上へと打ち込んだ。近くにいた二人はグロンギもろとも吹き飛ばされ、クウガも変身が解けてしまった。

ユウスケ「くっ……」

ネギ「皆さん……」

ガミオ「見たか！人間は強さを求め、戦いを求める！グロンギになるのも定めだ！」

倒れる二人を見て、ガミオは自信に満ちた声で語る。だが翼はゆっくりと起き上がり、ガミオを睨みつける。

明日菜「違っわ……ユウスケが戦うのは、誰も無意味な戦いをしないようにする為よ！」

刹那「誰もが悲しまないようにするために……」

木乃香「戦っんや!!」

ガミオ「……何？」

ネギ「例えば自分が闇に堕ちようと、誰かを笑顔にしたい！そう信じています！この人が誰かの笑顔を守るなら、僕は全力でこの人を支えます！」

ナギ「……知ってるか？この子の笑顔、悪くないぜ。」

ナギのその言葉を聞いた瞬間、ユウスケの中に眠っていた本当の気持ちが目覚めてく。そう、これが本当の戦士、仮面ライダークウガ誕生の瞬間だった。

ガミオ「貴様ら……一体何者だ?!」

ガミオがそう問うと、ネギとナギは再びディケイドライバーとレジエンドライバーを装着し、左腰に現れたライドブッカーからディケイドのカードをガミオに見せるように空へと掲げた。

ネギ「通りすがりの仮面ライダーです！！覚えておいてください！変身!!」

「ネギ、ナギ「変身!!」」

「カメンライド・ディケイド!!」

「カメンライド・レジエンド!!」

それぞれディケイドとレジェンドに変身した。変身が完了するとライドブッカードが勝手に開き、中から絵柄の消えたクウガのカードを含む三枚のカードが飛び出し、ディケイドの手に収まっていく。するとその瞬間、絵柄の無かった三枚のカードに絵柄が浮き出ていった。

ディケイド「ユウスケさん・・・」

ユウスケ「ああ！！変身！！」

ユウスケもクウガに変身した。そして・・・

明日菜「私達のカードが・・・」

刹那「光っている！！」

三人の手からパクティオーカードが現れると、絵柄がなかった九枚のカードに絵柄が浮き出ていった。

木乃香「力が戻ったんや！！」

明日菜「いくわよ！！」

そして・・・

明日菜、木乃香、刹那「アデアット！！」

三人はそう叫ぶと姿が変わった。明日菜は巨大な剣を装備した剣士に、木乃香は南京玉を装備した着物を着た姿に、刹那は背中に羽が生えた剣士となった。

刹那「これは・・・アーマーカード。」

明日菜「これなら戦えるわね。」

そして、明日菜達も戦い始めた。

レジェンド「俺はこいつで行くぜ！！」

ナギは新たなカードをレジェンドライバーに入れた。

『カメンライド・リュウキ・サバイブ！！』

レジェンドの姿が龍騎サバイブの姿へと化した。

そして・・・ディケイドはライドブッカードから先程のカードの一枚を取り出し、すぐにそれをディケイドライバーへと装填していった。

『ファイナルフォームライド！！ク・ク・ク・クウガ！！』

ディケイド「少しくすぐつたいですよ。」

クウガ「え！！？・・・・うわあ！！！」

するとクウガはその姿を巨大なクワガタへと変化していく。そう、
ディケイドが持つカードの一部、ファイナルフォームライドによつて、クウガはクウガゴウラムへと変身したのだ。

クウガ「これは・・・・」

ディケイド「僕達のです。」

そして・・・・戦いは始まった。

ガミオ「おのれ！！」

ガミオが放ったエネルギー弾は地上に打ち込まれていく。が、

龍騎S「そうさせないぜ！！」

『アタックライド・バーニングスラッシュ！！』

明日菜、刹那「はああああああああああああああ！！！！！！！！」

龍騎Sと明日菜と刹那の斬撃でかき消された。

ディケイドは飛翔していたクウガゴウラムの上に着地する。そして二人はガミオに向かって突っ込んでいく。

ガミオ「な、何？！」

二人「うおおおおおおッ！」

クウガゴウラムは二本の角のような部分でガミオを捕らえ、そのままビルへと突っ込んでいった。そしてディケイドは地上へ降り、クウガゴウラムは上空へ上がってクウガへと戻り、ビルの壁を走るように駆け降りていく。

クウガ「ハアアッ！」

ガミオ『又グオッ？！』

クウガはガミオに向かって飛び蹴りならぬ飛び降り蹴りを放ち、ガミオと共に地上へと落ちていく。そして地上には、ライドブッカーをソードモードにして構えるディケイドがガミオを目掛けて高く跳び上がっていた。

ディケイド「トリヤアアッ！」

ガミオ『グッ？！又オオッ！』

二人の合体技、ディケイドアサルトが見事に決まり、ガミオは体が燃えながら地上に堕ちていく。ディケイドと戻ったクウガも着地し、炎上するガミオに近づいていく。そしてレジェンドSもレジェンドへと戻り、ガミオに近づいた。

レジェンド「アンタもかつて、人だったのかもしれないな」

ガミオ『ウグツ…な、ならお前達は、何処から来た…?』

ディケイド「別の世界からです。」

ディケイドは呆気ない返事で返す。それを見たガミオも何処か笑っているような感じで最後の言葉を放つ。

ガミオ『リント…闇が晴れる…ぞ…』

その言葉と同時にガミオは消滅していった。辺りの黒い煙も晴れ、グロンギ達も煙と共に消えていってしまった。

その後

ネギ「本当にいいんですか？ユウスケさん？」

のどか「私達と一緒に旅するなんて・・・」

ユウスケ「俺、分かったんだ。これから皆と旅をして、それぞれの世界にいる人たちの笑顔を守るって決めたんだ。」

明日菜「ユウスケさん・・・」

ユウスケ「皆さん、これからよろしくお願いします!!」

ナギ「取り敢えず、この世界の滅びは止められた。これで、この世界での俺達の役目も終わったな。」

まき絵「今は取り敢えずそれでいいさ。さて、次の世界はどう行けばいいのか…」

ナギ「この絵画が教えてくれるぜ!!」

すると絵画が再び変わり始めた。その絵は満月の夜と高層ビル、そしてそのビルからドラゴンの首と手足が出ている感じの絵だった。

夕映「これはドラゴン・・・」

ナギ「次はキバの世界か・・・」

そのころ

つかさ「ユウ君・・・どうしてるかな？」

みゆき「彼を信じましょう。ユウスケさんなら大丈夫です。」

かがみ「ほら・・・いくわよ!!」

こなた「分かってるよ!!」

四人は再び歩き始めた。

だが、その後ろには何やら白い小さなコウモリのようなものがこなた達の後を追っていた。一体このコウモリはなんなのか？

次の世界はキバの世界

第4話「超絶・クウガゴウラム」（後書き）

次回

亜子「ここがキバの世界・・・」

ネギ「ここでは人間とファンガイアが共存しているんですか!？」

キバット「サクラ、こいつキバーラが警告していた奴じゃないか!」

キバ「貴方のことは聞いている!!この悪魔!!」

ダークキバ「俺は王だ!!」

ナギ「お前が王になる資格はない!!」

サクラ「私は王になりたくない・・・」

小狼「いつだつて俺はサクラの味方だよ。」

次回 第4話「第二楽章」キバ・CLAMPの世界」

Wake up! 運命の鎖を解き放て!!

第5話「第二楽章」キバ・CLAMPの世界」(前書き)

キバの世界は少しアレンジを変えました。あと少し長くなっています。

第5話「第二楽章」キバ・CLAMPの世界」

クウガの世界を救う事に成功したネギ達。そんなネギ達が別世界に行った頃、こなた、かがみ、つかさ、みゆきは変な蝙蝠に呼ばれて何処かへと連れてかれていた。

かがみ「ちよつと、何処まで行くのよ？」

こなた「蝙蝠ちゃん!？」

蝙蝠「フフフ…おいで、おいで♪」

蝙蝠はこなた達を歪みの中へと誘い、その歪みが晴れると其処は西洋風の豪華な部屋の中だった。

つかさ「ここって…どこ？」

みゆき「もしかしてネギ君達が言っていた異世界では……」

かがみ「その可能性があるわね。」

こなた「とにかく調べてみようか。」

するとそこへ…

スワローテイルファンガイア「貴様ら!!何をしている!!」

ステンドグラス状の怪人……スワローテイルファンガイアとライオンファンガイアが現れた。

つかさ「ふええええええ!!!!」

かがみ「どういうことなのよ!!」

ライオンファンガイア「とぼけるな!!ここはキャッスルドランの中だぞ!!」

スワローテイルファンガイア「どうやって侵入したんだ!!?」

みゆき「いえ……私達は……」

するとそこへ一人の青年が現れた。

桃也「どうした？」

スワローテイルファンガイア「桃也様、侵入者です!!」

桃也「何……」

こなた「いや……その……」

桃也「始末しろ！！この城に無断で入ったものを生かすな！！」

スワローテイルファンガイア、ライオンファンガイア「ははは！！」

二体のファンガイアはこなた達に襲いかかるうとしていた。そのとき
小狼「まってください！！王！！」

一人の少年が間に入った。

桃也「貴様は・・・！！！！」

小狼「彼女達は知らないで来たんです！！何かわけでも・・・」

桃也「小僧が・・・人間に対して情けなど無用だ！！やれ！！」

???「待つて、兄様！！」

桃也「え！！？」

そこにはドレスを着た一人の少女がいた。

桃也「サクラ・・・」

小狼「姫・・・」

サクラ「彼女達にもわけがあるのよ。だから見逃して・・・」

桃也「しかし・・・」

サクラ「兄さま！！」

桃也はしばらく考え・・・

桃也「勝手にしろ！！」

桃也は二体のファンガイアと共にその場を去った。

こなた「助かった。」

サクラ「ごめんなさい。兄が迷惑を掛けちゃって・・・私は木之元サ

クラといえます。」

小狼「李小狼です。」

キバット「なんか大変なことになっているみたいだな。」

こなた、かがみ、つかさ、みゆき「あーーーーー！！！！！！」

キバット「なんだ？俺の顔になんかついてるのか？」

こなた達はキバットを見て、驚きの声を上げた。

新たな世界にやって来たネギ達。その世界の様子を調べる為、一行
は外に出てみた。

ネギ「ここが新しい世界ですか……」

ナギ「そうだ。」

亜子「この世界にはうちの力があるということやね。」

美砂「そうみたいね。」

円「明日菜たちが戻れたなら私達もできるはずよ。」

桜子「きつとそうだよ。」

空白のカードを手にした亜子とチアリーダーのメンバーもそううなずいた。そんな時……

何かが通り過ぎた。するとネギ達の姿が変わった。ネギとナギは礼服を着ており、バイオリンケースを持っていた。亜子とチアリーダーのメンバーはバンドメンバーの衣装に代わった。亜子と美砂はギターを、円はベースを、桜子はドラムスティックをもっていた。

美砂「これの姿って……」

桜子「なんかでこぴんロケットみたいだね。」

ネギ「これが僕達の役割ですね。……あれは？」

ネギは何かに気づき、カメラを構えていく。桜子達も気になって進が見ている方向を向く。其処にあったのは……

亜子「な、なんや、アレ?!」

円「ビルに……ドラゴンの頭？」

そう、ネギが見ていたのは一際目立つ高層ビルに竜の頭が出ている光景だった。ナギはそつと呟く。

ナギ「キャッスルドラゴン……キバの世界だ……」

亜子「ここがキバの世界……」

すると一人の男が現れた。

男「はぁーい!!!」

その男はナギとネギを払いのけて、亜子達を連れて、D C Dへと入った。

亜子「ちよつ……!!!??」

円「なんなのよ!!!??」

明日菜「あれ？お客さん？」

木乃香「めずらしいな〜！！」

男「あれ？ここって喫茶店ではなかったんですか？」

あやか「いえそうですけど・・・」

ユウスケ「とにかくご注文をお願いします。」

男「それじゃコーヒーをおねがいします。」

五月「かしこまりました。」

そして、出されたコーヒーを男は飲み始めた。

男「美味しい！！前に飲んだより美味しいコーヒーじゃないか！！」

すると男の姿が変わり始めた。その姿にネギ達は驚いた。男は蜘蛛の姿をした怪人、スパイダーファンガイアへと変わった。

スパイダーファンガイア「いやー！！本当に美味かったよ。僕もこんな姿になっちゃったし。」

ユウスケ「おい・・・あれって・・・」

美砂、円、桜子「ファンガイア！！！！」

エヴァンジェリン「ほう・・・貴様がこの世界の敵であるファンガイアか・・・」

するとエヴァンジェリンはスパイダーファンガイアに攻撃をした。スパイダーファンガイア「なんだよ！！ファンガイアだからって追いつく気！！！！？」

ユウスケ「ごちゃごちゃとうるせえ！！」

ネギ「とにかく貴方を倒します！！」

二人は変身体制になるが・・・

ナギ「ちよつと待て！！」

ネギ「父さん！！この人はファンガイアですよ！！」

ナギ「だからだ。これを見る！！」

ナギが渡したチラシには『人間とファンガイアとの親睦の会』『人間とファンガイア共存の会の手引き』と書かれていた。

ネギ「これって・・・」

亜子「ここでは人間とファンガイアが仲良く暮らしてるということ

かいな！！？」

スパイダーファンガイア「何もしてないファンガイアを差別するのは禁止されてるだぞ！！親衛隊に、言いつけてやる！！プン！！」

スパイダーファンガイアは怒りながら外へ出た。するとその先には幼稚園服を帰宅途中の女の子達がいた。

明日菜「いけない子供達が！！ネギ！！ユウスケ！！」

ネギとユウスケは变身しようとするが・・・

スパイダーファンガイア「えーん！！えーん！！」

ネギ「え！！？」

スパイダーファンガイア「虐められたよ。ファンガイアは人間の店になんか来るなって！！」

何とスパイダーファンガイアは、少女達の前で膝立ちになると、そう訴えかけた。

ユウスケ「い、いや、でも……………」

少女A「いけないんだ。ママが言ってたよ。ファンガイアさんは、仲良くしなさいって」

少女B「ちよつと恐いけど、ね」

すると少女達はファンガイアを慰めていた。

ネギ「マジですか・・・」

そのころキャッスルドランでは

バッシャー「サクラちゃん、またいないよ！！」

キッティ「きつと外へ出たんだよ！！」

緑色の半魚人、バッシャーとピンクの猫娘、キッティはそうさげんだ。

ドッガ「まただ。王座の話を持ち出すとすぐ逃げ出してしまふ。」

スノー「本当に困った姫様だ。」

紫色のフランケン、ドッガと銀色の雪女、スノーは嘆いた。

ガルル「とにかく探すぞ！！」

ウィンディー「親衛隊の中で信頼できる人たちに連絡して探しても

らわないと・・・」

青い狼男、ガルルと白い鳥人、ウィンディーも探すように命じた。風「そうですね。サクラさんが王になれば・・・」

海「人間とファンガイアとの共存は保つことができるわ。」

光「とにかくさがさないと・・・」

知世「お願いしますね。」

三人の少女、光、海、風に知世はそう呼びかけた。

そのころ・・・ここはぼろぼろの洋館・・・そこにサクラと小狼がいた。

サクラ「・・・」

キバット「サクラ。なあサクラ。城に帰ろうぜ。王になる、何が不満なんだ？」

ケロ「ほんまやでサクラが王になればみんな幸せに暮らせるしな。」

モコナ「小狼からもなんか言ってやって・・・」

キバット、ケロ、モコナはそういうが・・・

小狼「ごめん三匹とも、俺はサクラの気持ち分かるんだ。」

キバットたちは諦めたかのようにこの場から去った。

サクラ「小狼・・・私は・・・」

小狼「大丈夫だよ。俺がいるから・・・」

一方、ネギ、ナギ、ユウスケ、明日菜、木乃香、刹那、亜子、美砂、円、桜子は町の様子を見ていた。

木乃香「この世界って人間とファンガイアが仲良く暮らしていることかいな？」

刹那「そうですね・・・」

ネギ「僕達の役割とは一体・・・」

するとバイオリンの音色が聞こえた。ネギ達はその音を追っていくと、先ほどの洋館の前にたどり着いた。

ネギ「バイオリンはここから聞こえましたね。」

すると音が止むと、一人の少女が現れた。

サクラ「あっ……」

ネギ「貴方が弾いていたんですね。本当に素晴らしい演奏でした。」
明日菜「もう一回、聞かせてくれる？」

二人はサクラに近づこうとしたそのとき……

サクラ「ダメ……！」

ネギ「え……？」

サクラ「あっごめんなさい……でも人間が私に近づかないでください……」

ナギ「お前……ファンガイアか？」

サクラ「だったらなんですか？怖いのですか？」

ナギ「別に俺達にとっては人間もファンガイアも変わらないだろ。第一人を襲わないだろ。」

ネギ「僕達もそう思いますよ。」

サクラ「そんなのは……表面的です……！」

すると街から騒ぎ声が聞こえていた。

ネギ「なにかあったんでしょうか？」

ユウスケ「とにかく行こう……！」

ネギ達は騒ぎのあるほうへ向かった。

そのころ町ではホースファンガイアとオクトパスファンガイアが人間の女性を追いかけていた。その前にネギたちが立ちふさがった。

ネギ「どこが人間との共存ですか……！」

ユウスケ「そうだぞ……！」

ホースファンガイア「お前達、そこをどけ……！その女は掟に背いたのだ……！」

オクトパスファンガイア「掟に背くものは死あるのみだ……！」

ナギ「気にいらねえな……！二人とも行くぞ……！」

そして……

ネギ、ナギ、ユウスケ「変身……！」

『カメンライド・ディケイド!!』

『カメンライド・レジエンド!!』

それぞれディケイドとレジエンドとクウガに変身した。そして三人はファンガイアたちに攻撃した。するとそこへサクラと小狼が現れた。

サクラ「あああ!!」

小狼「なんということを・・・」

そして・・・

サクラ「やめて!!」

サクラはディケイドとクウガを押し出した。

ディケイド「ええええ!!?」

サクラ「貴方が・・・ディケイド・・・」

キバット「サクラ、こいつキバラーが警告していた奴じゃないか!!」

そして・・・

サクラ「キバット!!」

キバット「おう!キバって、いくぜ!!」

サクラはキバットを自分の左手に近づける。すると...

キバット「ガブツ!!」

なんとキバットはサクラの手に思いっきり噛みついたのである。そして噛まれたサクラの顔にはステンドグラスのような模様が浮かび、腰の所に鎖が何重にも巻きつき赤いベルトへと変化していった。

サクラ「変身ツ!!」

キバットは現れたベルトの止まり木部分にセットすると、サクラの体が徐々に変化し、異形の姿になっていく。そう、この姿こそこの世界の仮面ライダー、キバの姿なのである。

ホースファンガイア「姫様!!?」

クウガ「君がキバなのか!!?」

するとクウガの前に小狼が現れた。

小狼「お前の相手は俺だ!!」

すると啓子はイクサベルトを腰に装着させ、マルチターミナルエレクトロを当てた。

『レ・ディ・ー!』

小狼「変身!」

『ファイ・ス・ト・オ・ン!』

小狼はイクサに変身した。そして二人は襲い掛かった。

デイケイド「何するんですか!」

キバ「貴方のことは聞いている!この悪魔!」

クウガ「俺のときと同じだ!」

イクサ「お前達の命、神に返せ!」

それをみたレジェンドは向かおうとするが

レジェンド「どうやら・・・俺の相手はアンタのようだな・・・」

桃也「貴様・・・よくもわが同胞を・・・闇のキバットよ来い!」

そこへキバットに似た蝙蝠が現れた。

キバット二世「絶滅タイムだ!!ガブリッ!」

桃也「変身!」

桃也はダークキバへと変身した。そしてレジェンドと戦った。

明日菜「私達も行くわよ!」

刹那「はい!」

明日菜、木乃香、刹那は向かおうとするが・・・

ケロ「おっとお前らの相手はワイや!」

ケロが立ちふさがった。

明日菜「ぬいぐるみはどきなさい!」

ケロ「誰がぬいぐるみや!」

ケロは翼に包まれ、それを広げると黄金に輝くライオンの姿となった。

ケルベロス「覚悟せい!」

明日菜、木乃香、刹那「アデアット!」

三人はそう叫ぶと姿が変わった。明日菜は猪に、木乃香はコアラに、刹那は鶴の姿となった。

明日菜「これは……スカカード!!?」

木乃香「外れや!!」

三人はケルベロスに追いかけられる結果になった。

ケルベロス「はああああああ!!!!」

明日菜、木乃香、刹那「きゃああああああ!!!!」

そのころレジェンドとクウガとイクサとダークキバも激闘を繰り広げていた。

イクサ「はああああああああ!!!!」

クウガ「くそ……この野郎!!」

クウガは木の棒を取り出すと……

クウガ「超変身!!」

クウガはタイタンフォームとなりイクサと戦った。

レジェンド「お前……いつたいたんだ!?!」

ダークキバ「俺は……王だ!!」

そのころディケイドとキバも戦い続けていた。

ディケイド「まってください……僕はただ……」

キバ「うるさい!!」

キバット「サクラ、すこし落ち着け!!」

ベルトの止まり木に止まっているキバットがキバを落ち着かせようとするが、キバはそれを聞かず左腰にある六つの笛の内緑の笛と桃色の笛をキバットに吹かせた。

キバ「来て!!バツシャー、キッティー!!」

キバット「バツシャーマグナム!キッティークロー!」

するとメロディーが鳴り響いた。

キャッスルドラム内

スノー「いたか!!?」

ドッガ「だめだ!!!!いない」

ウィンディー「本当にどこへ行つたのよ!!」

ガルル「まったく、あの姫には自覚というのは無いのか…?」

するとメロディーが鳴り響いた。

バツシャー「呼ばれた!!!?」

キツティー「あたしも!!!」

バツシャーとキツティーは彫刻になるとキバのもとに向かった。

キャッスルドランから飛んで来たバツシャーとキツティーの彫像を確認したキバがそれを掴まえると、バツシャーの彫像は銃のような物に、キツティーの彫像は鉤爪のようなものに変化し、キバの腕に鎖が巻き付いてく。鎖が解き放たれると、右腕が緑色に、左腕が桃色に変わり、次にボディにも鎖が巻き付いていくと其処も緑の魚のような装甲と桃色の猫のような装甲へと変化し、最後にキバとキバツトの瞳が、右が緑へ左が桃色と変わっていった。キバ・バツシャー・キツティーフォームである。

キバ「はっ!!!」

キバはバツシャーマグナムから水の弾を打ち出した。デイケイドはそれを受けて吹っ飛ばされてしまう。さらにキツティークローで切り裂いた。

デイケイド「こうなったら・・・」

デイケイドはすぐに起き上がり、ライドブッカーから一枚のカードを取り出した。そして

デイケイド「変身!!」

その言葉と同時にカードをバックルにセットし、スライドさせる。

『カメンライド!!!クウガ!!!』

デイケイドはクウガへと姿を変えた。

キバ「姿が変わった!!!」

クウガ「俺!!!?」

デイケイド「さあ、お仕置きタイムだ!!」

クウガに変身したデイケイド（以後Dクウガ）はキバとの間合いを

詰め、キバが持っていたバツシャーマグナムとキツティークローを蹴りで弾き飛ばし、力を込めた打撃を連発していく。

キバ「くっ、ドツガ、スノー……！」

キバット「ドツガハンマー！スノーロッド！」

キバはすぐに体勢を戻し、次に紫の笛、ドツガフェッスルと銀のフェッスルをキバットに吹かせる。

重低音が辺りに響き渡ると、先程のバツシャーの彫像と同じように今度は紫の彫像と銀の彫像がキバの元に飛んで来た。キバは飛んで来た彫像を掴むと、その彫像は拳のような鎚、ドツガハンマーへ、雪の結晶のような杖、スノーロッドと変化し、再びキバの身体に鎖が巻き付いていく。鎖が解き放たれると、キバの鎧は左右対称の重厚な紫と銀の鎧になっており、キバとキバットの瞳も紫と銀へと変色していった。キバ・ドツガ・スノーフォームである。

キバ「ハアアッ！」

キバはドツガハンマーとスノーロッドを振り回し、Dクウガを攻撃した。Dクウガは吹き飛ばされてしまった。

Dクウガ「そっちがフォームチェンジなら、こっちもフォームチェンジです！」

Dクウガはキバの攻撃をかわしながらライドブッカーから一枚の取り出し、カードをデイクイドライバーへとセットする。

『フォームライド……！クウガ・タイタン……！』

電子音声が響くと、Dクウガの姿が白銀の鎧に紫のラインが入ったタイタンフォームへと変化した。Dクウガはキバのドツガハンマーとスノーロッドを軽々と受け止め、それを奪ってキバを弾き飛ばした。

Dクウガ「これ借りますね……！」

Dクウガがそう言うのとドツガハンマーとスノーロッドが紫色の剣、タイタンソードへと変化していく。

キバ「ガルル、ウィンディー……！貴方達も来て……！」

キバット「ガルルセイバー……！ウィンディーアロー……！」

キバは左腰にあるガルルフエッスルとウィンディーフェッスルをキバットに吹かせる。キバットが音色を奏でると今度は青い彫像と白い彫像が飛んで来て、それがキバの手に収まると金色の刃が輝くガルルセイバーと鳥の羽を模した弓ウィンディーアローへと変化し、更にキバも鎖が巻きつき、今度は胴体が青と白へと、左腕のみ青い鎧に、右腕のみ白い鎧になり瞳も青と白に変色した。キバ・ガルル・ウィンディーフォームである。

キバ「はあああああああああああああ！！！！！」

キバはDクウガをガルルセイバーで切り裂き、ウィンディーから放った矢で攻撃した。

Dクウガ「こうなったら・・・」

Dクウガはキバから離れ、ライドブッカーからカードを取り出し、ディケイドライダーへとセットする。

『フォームライド！！クウガ・ドラゴン！』

電子音声が響くと今度は青い鎧のドラゴンフォームへと変化し、持っていたタイタンソードも青いドラゴンロッドへと変化した。Dクウガとキバがぶつかり合い、それぞれ最初の形態に戻った。キバはディケイドに立ち向かおうとするがすると・・・

一方、レジェンドとダークキバの攻撃を止めていたものがいた。

サガ「王子、そのくらいにしたらどうですか？」

ダークキバ「雪兎！！？」

レジェンド「ほう・・・」

そして・・・

こなた「ちよつと待ったー！！！」

そこへやってきたのはこなた、かがみ、つかさ、みゆきであった。クウガ「こなた！！？それにみんなもどうして！！？」

こなた「姫！！？この者たちは私達の仲間です！！悪魔ではありませんん！！！」

そして、キバ達は変身を解除した。

サクラ「こなたちゃんか・・・」

かがみ「ほらあんた達も謝って!!」

ユウスケ「ちよつと待て!!俺達は人間の女性を助けただけだ!!」

ホースファンガイア「それは違うぞ!!」

するとその先にはホースファンガイアとオクトパスファンガイアがいて、さきほどの女性を捕まえていた。しかもこの女性の下あごには牙のようなものがあつた。

ネギ「あれは・・・」

ホースファンガイア「お前達が助けたこの女はファンガイアだ!!」
「」

ネギ「どういうことですか!!?」

こなた「あの女の人は人間のライフエナジーを吸うという禁忌を犯したんだよ。」

女性「何が悪いのよ!!あれはファンガイアとして当然のことに決まっているでしょ私だけじゃなくて他の皆も苦しんでいるのよ!!」
「」

するとホースファンガイアとオクトパスファンガイアはそれぞれの武器で女性を攻撃した。女性はガラスが砕けたかのように消えた。サクラはそれを見て悲しそうな顔をしていた。

そして、DCDに戻ったネギ達はこなた達に来たわけを聞いた。こなた達は木乃香達が用意したお菓子をいただいていた。

つかさ「おいしい!!」

あやか「そうですか!!」

千鶴「ふふふ作ったかいがあつたわね。」

こなた「このクッキー最高においしいよ。」

ユウスケ「なんでお前らがいるんだよ!!」

こなた「だって私達はユウスケの恋人だし!!」

ゴチン!!

こなた「はう!!!!」

ユウスケ「殴るぞ。」

こなた「うう。もう殴ってるじゃん・・・」

ネギ「どうして四人ともここにいるんですか？」

それを聞いたみゆきが答えた。

みゆき「それは帰り道でへんな蝙蝠に出会って、それに誘われていたらキャツスルドランの中にいました。」

まき絵「その蝙蝠って・・・」

キバーラ「私のことかしら？」

そこへ一匹の蝙蝠が現れた。

ネギ「貴方がこなたさんと呼んだ・・・」

キバーラ「そうよ。私はキバーラ。鳴滝様の命令で貴方達を守りに来たのよ。」

カモ「するとサクラ嬢ちゃんに兄貴達が悪魔っていたのはおめえじやねえのか？」

キバーラ「そうよ。誰かが私に成りすましてサクラにうそ言ったのよ。ごめんなさいね。」

こなた「それで私達は親衛隊に入ってたわけ。」

かがみ「ええ。あのサクラって子は人間とファンガイアの間に生まれたらしくて、人間とファンガイアの架け橋になるようになれるように一生懸命頑張っているって聞いてさ、なんか力になってやりたくてね」

ネギ「そうですか・・・」

明日菜「そういえばナギさんは？」

そのころキャツスルドランでは

アームズモンスター達はサクラと話し合っていた。

バツシャー「即位式いつにしようか？サクラちゃん！！？」

キッティ「サクラちゃんならいい王になれるよ。」

サクラ「私は・・・王にはなりたくない・・・」

ドッグ「なぜだ！！サクラ！！？今日もキバになって戦ったのでは

ないか!!」

スノー「キバの鎧を受け継いだサクラこそ王にふさわしいのだぞ!!」

ウィンディー「サクラちゃん。もう10年も玉座は開いているのよ。ファンガイアの中には掟に背くものも増えてきたし・・・」

ガルル「それにもし桃也が王になれば掟を破棄し、人間を支配し餌にしようとするかもしれんぞ。サクラ、お前が王になることを誰もが望んでいるんだ!!」

しかし、サクラはそのまま城をでた。それをみた小狼も追いかけた。風「やはりだめでしたか・・・」

海「サクラも頑固なところあるしね・・・」

光「サクラちゃん・・・」

ドッグ「やはりサクラでは無理なのか？」

ウィンディー「でも桃也以外にキバの鎧を受け継ぐものはいないし・

・・・」

知世「気長に待つしかありませんわね。」

ガルル「何事もなければいいが・・・」

そのころ

雪兎「サクラ姫は決意を固めていないようだね。桃也。」

桃也「もしだめならこの俺が王になる・・・」

???「そいつはどうかね？」

そこへナギが現れた。

桃也「貴様!!」

ナギ「お前では王にはなれない。いやなる資格すらもない!!」

桃也「黙れ!!」

桃也はナギに殴りかかるがよけられてしまう。

桃也「俺では王になれないということはどういう意味だ!!?」

ナギ「自分で考える!!」

そついうとナギはその場から去った。

そのころサクラは

サクラ「・・・・・・・・・・」

小狼「サクラ・・・・・・・・」

サクラ「私・・・人間とファンガイアとの間生まれた子だよ・・・

そんな半端な私が王になんて・・・・・・・・」

小狼「じゃあ俺はそんなサクラについてくると思うか？」

サクラ「え！！？」

小狼「俺はサクラが王だから近づいたわけではない。サクラと仲良
くしたいからいるんだ。それに人間とファンガイアの心を持ってい
るこそ、両者を理解するのにはいいじゃないのか？」

サクラ「小狼・・・・・・・・」

小狼「いつだつて俺はサクラの味方だよ。」

小狼の言葉にサクラは笑顔になった。

次の世界 キバ・CLAMPの世界

第5話「第二楽章」キバ・CLAMPの世界」(後書き)

次回

撫子「サクラちゃんと桃也君を助けてあげて・・・」

デイケイド「なぜ僕達と戦うんですか!!?」

カイザ「邪魔なんだよ!!」

鳴滝「やつらも動き出しか・・・ダークショッカーが・・・」

ビートルファンガイア「俺が王だ!!」

次回 第6話「キャッスルドラン攻防戦!!」

Wake up! 運命の鎖を解き放て!!

仮面ライダーディケイドNEO 劇場版予告（前書き）

とりあえずは劇場版の予告を書きました。あと龍騎から響鬼までのライダーも決まりました。ほとんど知っているアニメやゲームもあります。作れるかどうかはわかりませんがよろしくお願いします。

仮面ライダーディケイドNEO 劇場版予告

すべての仮面ライダーの世界を救った。ネギ達3A

クウガ・らき すたの世界

ユウスケ「俺も戦う！！アンタ達だけに戦わせたら皆笑顔でいられなくなる！！」

キバ・CLAMPの世界

サクラ「私は・・・王になりたい！！」

龍騎・シャイニングウィンドの世界

キリヤ「今は俺達がチームだ！！」

ブレイド・遊戯王GXの世界

十代「違うぜ。君はこの世界を救った。」

ファイズ・ハヤテのごとく！の世界

ハヤテ「これはお嬢様の大切な夢なんだ！！」

エクセリオンの世界

なのは「助けるよ・・・何が何でも絶対！！」

アギト・こち亀の世界

両津「違う！！ワシはただの人間だ！！」

電王・ドラえもんの世界

モモタロス「俺、参上！！」

ヴァルキリーの世界

美香「私は憎しみで戦っているわけではない・・・誰かを守りたいために戦っているのよ！！」

ウルフェンの世界

ファンゲ「俺は獣の血を恨まない！！この血の力で俺は戦うんだ！！」

カブト・うたわれるものの世界

ハクオロ「いつでも帰れる場所がある。だから私は離れていられる

んだ。」

響鬼・F a t e / s t a y n i g h t の世界
士郎「俺は・・・鬼になる!!」

しかし、突然、麻帆良に現れた多数の怪人達

そして・・・これがネギ達の最後の戦いになろうとしていた。

現在、麻帆良は最強の悪の組織・大グランショッカーが征服していた。

そして・・・次々に消えていく生徒達。

しかし・・・ネギは諦めなかった。

ネギ「僕は絶対に諦めない!!だから・・・僕は破壊します!!
大グランショッカーを!!」

ハルヒ「よく言ったわね。」

ユウスケ「それでこそネギだ!!」

なのは「みんな行くよ!!」

???「貴様ら一体、何者だ!!?」

クウガ、アギト、龍騎、ブレイド、響鬼、ウルフェン「俺達は!!
!!」

キバ、エクセリオン、ヴァルキリー、ディエンド「私達は!!!!」
ファイズ、ディケイド「僕達は!!」

カブト「天の道を行き!!」

ディロード「すべてを破壊し・・・」

レジェンド「すべてをつなぐ・・・」

ディケイド「通りすがりの仮面ライダーと・・・」

電王「格世界の仮面ライダー!!!俺達全員そろって・・・」
全員「参上!!!」

ディケイド「覚えておいてください!!」

今・・・麻帆良にて最初で最後のライダー大戦が始まった。

仮面ライダーディケイドNEO ファイナルバトル・VS大グラ
ンショッカー

今秋公開予定

仮面ライダーディケイドNEO 劇場版予告（後書き）

とりあえずは秋までにはすべてを完成したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2713k/>

仮面ライダーディケイドNeo

2010年12月1日15時21分発行